

# 野地峰

## 白滝の尾根

野地峰は嶺北地方の土予国境。大川村と新居浜市の境。かつて栄えた白滝銅山を山腹に抱えている。山頂はなだらかで360°の大展望。ここから見る四国の山並は絶佳。かつて土佐と伊予と結んだ往還が野地峰を越えていた。峠には首なし地蔵が建てられ、道中旅人の安全を見守っていたことだろう。別名「白滝越え」とも言われる。太平洋と瀬戸内海を隔てる大分水嶺でもある。この峠に立つと四国のまん中にいることを実感できる。

地図を見てその風景の中にたずなむ

白滝の土地の記憶を想像しついでみる。



大野三角点(二等) 1400m

江島山脈の名前の由来は、後白河法皇の三十三間堂建立に使われた木材が優秀であったので、その産地に法皇の名前を付けることが許されたという。

赤石山脈を越えて伊予三島の瀬戸内まで30キロにおよぶ架空索道で鉱石や食料品日用品を運搬していたという。

赤石山脈 江島山脈

金砂湖方面

大登山山

野地峰 1279.4m

東光森山へ 道標 東光森へ4.4km 野地峰へ2.2km

ブナ、カンバの尾根 スダク朽れている

滑車台跡 (土切)

鹿を2頭見た。ここが鹿に食べられはしないかと願う。

首なし地蔵様

水谷へ通じる 往還があるらしい 切れこみ フォア残がい 足元に注意

白滝のテラス

見晴良

野地峰 (1279.4m) 反射板

美しい笹原の道

分水嶺

分水嶺を意識しながら 稜線を歩くのが好き。雨水がこの尾根のどちらに降るかで、行き着く海は大きく変わる。ぼくの毎日も、日々いさな分水嶺をつまかきながら道歩きながら今を生きている。

白滝銅山

元禄12年(1699)には大北川銅山の試掘が始められ、その後、文化12年(1815)に麻谷(朝谷)銅山が開かれている。明治26年、白滝銅山大北川銅山の採掘が着手され、同37年ごろには人の背によって精銅が野地峰を越えて輸送されていたと大川村誌に記録されている。

昭和4年から日本鉱業の経営となり、採掘が続けられ、最盛期には戸数417戸、人口1960人にふくれみがり、諸施設も整って白滝銀座が出現して盛況をまわめたという。

昭和43年あたりから経営が困難となり、加えて大火などもあって昭和47年3月に閉山。白滝銅山の歴史の幕が閉じられる。(土佐の峠風土記より)

登山道の途中に銅山探掘の錆びたバケツがのこっていたりする。

渡渉 (0-10mあり)

白滝銅山の名前。1916年大北川銅山の木、大北川、白滝、中蔵、葛木、朝谷の7銅山の総称として白滝銅山と定められた。

山村広場は銅山の総合事務所や採掘場、大蔵の山を豊地にしたもの。すごい規模だ。

人工林

野地峰は銅山が栄えていた時代人や物資が通じていた。大川村によると、伊予三島からの船を越えて白滝の銅山宿舎に降りた日、足が立たず一日中寝たという話があったという。

麻谷山国府

峠路に上った時、どちらの道を選ぶのかいつも迷って生きている。ある時は目に見えぬ働きによって方向を決めたように思うことがある。確かなことは、77人の人々の恩恵を受けて今の自分がいるということだ。

せり峰方面よく見える 遠く手箱越え方面も。

美しいアサの森が広がっている

石標

八方アサ

黒岩山 (1341.6m)

早天山へ

土佐町境

白滝の語源 白滝権現やすだれの滝または白滝と称せられる滝にちなんで地名と伝えられており、野地峰越えは別名「白滝越え」とも言われていた。

白滝神社

登山口 (土切)

WC 山村広場

中道標

早登山口 林道 (トロッコ道跡?)

はちまん地蔵菩薩センター

吉野川畔から白滝に通ずる道は、土佐町の上津川をさかのぼり早天山の東を巻いて標高980mの村境を越え、馬で物資が運ばれていたという。

参考文献

土佐の峠風土記

2020年4月25日 (いつもとちがう春 それぞれの風は早緑)

自然王国 白滝の里

八方アサ

2020.6.9 No.106